

弟子屈 → 十勝川

短食 2 の 2

北海道へ来てから早くも5日目。そろそろ家が恋しくなり、又バスの旅に少々疲れ気味。でも今日は、あの悲しく美しいロマンスを秘めるというマリモを、阿寒湖に見ることが出来るにあつて、一同胸をはずませバスに乗り込む。弟子屈と阿寒湖を結ぶ国道を、俗に阿寒湖の横断道路といい、この道路も相当の恋愛経験があるらしく、ほれてほれてほれぬいてこのバスも適度を通りこしての強烈な、自家製アンマ機にとつて変る。バスも私達を歓迎し、出来る限りのサービスを尽くしてくれているのだらうと善意に解釈して、我慢しつつ今日最初の展望台双岳台へと向う。車中より移り変わる窓の景色は、エゾマツトドマツの寒性針葉樹林をはじめ、カンパ類、カエデ類、ナナカマド等を交えた天然林である。ガイドさんよりエゾマツとトドマツの見分け方を教えていただき、即席の食物ならず植物学者となり、あちらは白っぽい感じの灰白褐色の樹皮で横に縞があり、又枝は下向きであるからトドマツだ。こちらは灰褐色で不規則なウロコ状の裂目があり枝は上向きであるからエゾマツだと得意顔になる。そうこうしているうちに切り立つた道路から、樹海越しに雄大な雄阿寒岳、雌阿寒岳を望める双岳台に着く。ここで一休み。円錐形に近い山谷で、最も量感をもつてせまるのが雄阿寒岳、その横にほんやりかすんで雌阿寒岳が見える。しばしうつりとこの風景にみとれながら、バスに乗り込むのが惜しいような気持でこの地を後にする。窓の外は相変わらずエゾマツ、トドマツの大樹海であり北海道の森林を代表する大きく美しい針葉樹林である。その間をぬつてパンケトー、パンケトーを見おろす双湖台に到着。丁度北海道の地形を表わしたような湖パンケトーが手前に、そして向こう側にパンケトーがちよつぱり姿を見せる。濃緑の大原始林の中に碧色の水をたたえる静かな姉妹湖は、一枚の絵でも見ているよりである。近よりがたいまでの神秘的な名状しがたい美しさに、私達も心を奪われ、やはりここは北海道なんだナと再認識もする。又バスに乗らなければならぬ!! いつもどこでも、時間を気にし、時間に追い回されているような感じをこういう時には、一層強く感じたものである。次はいよいよ阿寒湖である。窓の景色も変りばえがなく、そろそろまぶたの上下が和親条約を結びたがる。バスの中のあちこちでこつくりこつくり。眠むると体重が増加するという。バスは大丈夫かしら? と心配しながら私も重荷

の1人となる。いい気持で寝ていたところ友達にゆり動かされ、気がついてみると阿寒湖畔に来ていた。昼食の後、遊覧船に乗る。この阿寒湖上に沈んだり浮いたりしている美しい緑色のマリモが、見られるものと思つていたのに、ここへ来る途中マリモ保護の為、チュウライ島の保護施設に送られたことを聞き一同ガツカリ。行つてみると水槽の中に入れており、直径1cm位の小さいものから20cm位あるかと思われる大きなものまで案外沢山あつた。さわりたいような気もする、美しいピロード状の表面である。ここにも数々の思い出を残し、バスは一路今夜の宿泊地十勝川温泉へ。

十勝川から襟裳岬を経て、登別へ

大食3

7月23日

昨晚「てるてる坊主」を放つたらかしにしておいた報いか、今日は空がどんよりと曇り、小雨が降っている。旅行も今日で9日目、そろそろ疲れが出て、昨日の夜は早くから寝てしまった。「色白の美肌」になるという、この十勝川温泉にもゆつくりと入浴しなかつたのか、皆んなの顔は色白とはいい難かつた。午前7時バスに乗車。今日は襟裳岬から登別まで10時間、バスでの強行軍である。今までの旅館の中で、最も強烈な印象を与えてくれた雨宮館をあとにした。

バスの窓から左右に見える亜麻、甜菜、大豆、小豆をめずらしく思いながら眺め、時々、かけ回っている、道産子馬の足の短かさに同情し、そして適当に睡眠をとりながら、北海道の最南端襟裳岬に到着。雨はやんでいたが、風は冷たく、前方は霧がかかり、何があるのかはつきり見えない。休憩の後浦河へ。ここで昼食。今、鳥に卵を産ませているのかと思うほど長く待たされたが、さすがにお腹が減つては文句もいわず、黙々と食事した。売店で、この名産であるこんぶを売っていたが、かさが高く、軽く、そして安いので大好評。浦河を出発して登別へ向う途中、この辺の港まつりの行列とすれ違つた。思わぬところで楽しいお祭り気分浸つた。この先まだ長時間の長旅なので、バスの中では「のど自慢」をやつた。何時あたるかしらとハラハラしながらも、指名されると美声をとどろかし、大い